

アキュフェーズのプロダクト

スピーカー再生オーディオを強力に打ち出すプレーヤーとアンプ
見たい聞きたい行きたいレポート 照井 和彦 JAS 事務局長

1月17日新春の日差しがまぶしい午後、神奈川県横浜市にあるアキュフェーズを訪ねました。有楽町で開催されたオーディオショーで出会った DP-950/DC-950 が奏でるスーパーオーディオ CD 再生音に、今までに聴いたことのないただならぬ気配を感じ、これは一体どういうプロダクトで誰が創っているのかを知りたくなったのがキッカケです。

東急電車たまプラーザ駅から閑静な住宅地を抜けて10分ほど歩くとアキュフェーズ社屋が見えてきます。ここでオーディオプロダクトの企画、設計、製造、販売までの機能が全て揃い、働く人達も現在80人と創業当時からの企業規模を守っているとのこと。

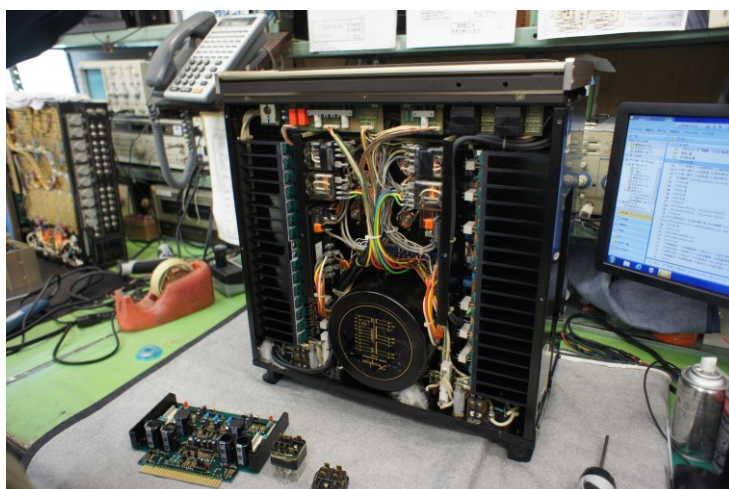


アキュフェーズ社屋全景

アフターサービス部門

1972年創業の同社はこれまで販売出荷してきたおおよそ200モデル全商品について、保証期間が過ぎてもお客さまがサービスを望む場合にはお応えしていくとのことで、エンジニア6人体制で対応していました。作業スペースには抵抗器やキャパシターなどのリード部品がシリーズ毎壁一面パーツボックスに整然と保管されており、スイッチや信号リレーなど電気接点を持つ部品は一点ずつシュリンクし空気を遮断するなど長期保管に慎重な配慮がなされています。

同社が独自搭載している音量可変回路 AAVA 方式ボリュウムコントロールは経年変化による接点不良、いわゆるガリを嫌い、また、パワーアンプ出力ヘシリーズに入るプロテクションリレーも同じく接触不良を避けるために MOS FET に置き換えるなども、電気回路全般に渡って品位を保ち続けるために開発してきたもので、サービス部門からの市場不良フィードバックを大切に尊重しているという説明に、大いにうなずいてしまいました。



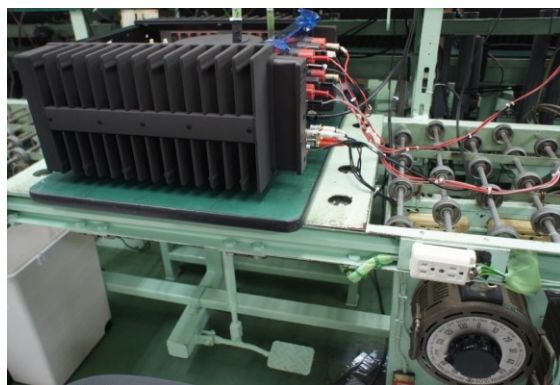
サービス対応中のパワーアンプ P-800

製造部門

この日は DP-560 がライン最終部に仕掛けており出荷直前に、C-3850 が製造途中に、A-70 が丁度投入され始めたところでした。



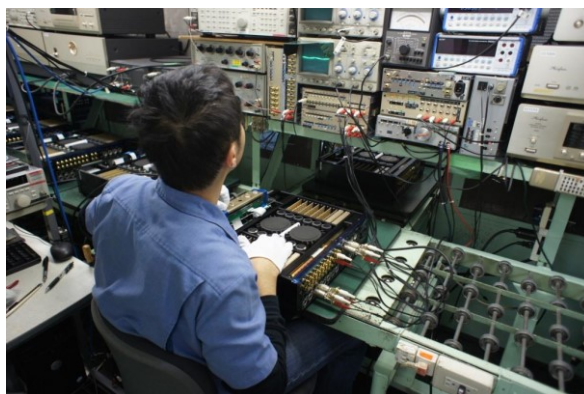
ライン上の A-70 本体シャーシ（写真左）と取付を待つヒートシンク部分（写真右）



ライン上で最初に電源を入れる時のスライダック（写真左）電気調整中の A-70（写真右）



ライン上で行列通電しながら次工程を待つ A-70



電気調整を待つ C-3850（写真左）と調整中の様子（写真右）



フロントサブパネルの組立工程（写真左）とパネル部分の組立工程（写真右）

C-3850 のサブパネルを開閉させる時の動作フィーリングは大切なポイントです、という説明を聞いて、よくよく見るとそのために専用のギアシステムを採用して、非常に丁寧に作り込んで組み上げていくのが判ります。



パネル取付 専用治具（スペーサー）を挟み正確に位置合せを行う



ボリュームノブ取付作業 センター出しのためにもう一度ナットを緩めて位置を調整



再び電気調整工程に入る C-3850（写真左）と最終音出し確認中の DP-560（写真右）

ご紹介する写真からは、一つひとつの作業工程は時間（速さ）ではなくて品質（美しさ）ありきで、コスト追求ではない丁寧な製造空間であると感じ取って頂けると思います。

開発・技術部門

現在 22 人のエンジニアが商品開発を推進しており、新しい企画が持ち上がる毎にメンバーが構成されるということで、アナログ電気回路を担当してその次は機構部を、そして今はデジタル系を担当する、という具合に一人ひとりのエンジニアリングカバー範囲が驚くほど広いのも同社の特徴です。筆者の前職で働いていた組織では電気屋さんは一生電気を、メカ屋さんは一生メカを担当していましたので、ちょっと驚きました。



DP-950/DC-950 はステレオサウンド誌 200 号に詳しい情報を譲りますが、トランスポートとコンバーターを結ぶ HS-LINK がバージョンアップされて、クロック系を大幅に見直したのが大きな特徴ということで、デジタルの進化による再生音質向上はまだまだ終点に至っておらず奥の深い部分であると改めて思いました。また、カタログにも写真がありますが、このプレーヤーにしてもプリアンプにしてもまるでパワーアンプかと思わせる

ほどに強力な大きな電源部分を同社商品に搭載されていることが判ります。基本と言えばキホンで、電源電圧や電源電力をトランジスタなどの素子が切ったり貼ったりしてのオーディオ信号な訳ですから、この上流で源となる電源回路は一番おさえておきたい部分です。採用される部品も同じ仕様でいくつかのサンプルを注文入手して試聴を繰り返し、場合によってはメーカーにフィードバックしながら決めて行くそうで、強い音質へのこだわりが感じられます。

このほか DC-950 に ESS テクノロジー社製のデジタル素子（DA コンバーター）を採用して検討するに至ったお話しや、A クラスパワーアンプの設計のミソになる巨大電源トランスとの闘い（重量とフラックス）など、メンバーの皆さんからは興味つきないお話を伺いました。



開発部門のすぐ脇に位置する試聴室（写真左）と音質確認を終えた信号系部品類（写真右）

取材終盤では DP-950/DC-950 を試聴させて頂きました。登場して今年 18 年目となるスーパーオーディオ CD ですが、1 ビット DSD も 11.2MHz のファイル再生ができる今の時代には 2.82MHz サンプリングであるなど取り残されているような心配もありますが、この 950 兄弟を聴いてとても救われる思いをしております。fff と行った大きな音ではなく、室内楽や大編成のオーケストラでも ppp 位のさわさわと奏でる弦の音が、決して崩れることなく、また、埋もれることなく、奏者がそこに居るように再生される音に感銘を受けました。機会があれば手持ちのスーパーオーディオ CD タイトルを全部持ち込んで聴き直したいですね。



今回の取材にお応え頂きました皆さん 写真左から

陰山大係長、島崎則一常務取締役、鈴木雅臣副社長、齋藤重正会長、
中川恵介主任、山本誠部長、伊東健一係長、花田恒健参事、嶋田和夫課長

午後一番でお約束した訪問でしたが、楽しい取材はあっという間に時間が流れてしまい、とうとう終業時間になるまで居座ってしまいました。それほど皆さんからのお話しは熱心にご対応頂き、技術も判りやすく、そしてオーディオへの愛情をととても感じられる時間となりました。取材にお応え頂きました皆さんそしてアフターサービス部門、製造部門の皆さん、大変お世話になりました。ありがとうございます。